

グループ学習におけるICTの活用方法を探る

学校名	諫早市立飯盛中学校
所在地	〒854-1111 長崎県諫早市飯盛町平古場60番地
学級数	7
児童・生徒数	247名
職員数/会員数	19名
学校長	林田 由紀博
研究代表者	田中 康之
ホームページ アドレス	http://www.isahaya-snet.ed.jp/school/jh-iimori/



1. はじめに

本校では、平成 19 年度より特別支援教育の視点に基づいた、授業における ICT 活用の方法を探ってきた。平成 22 年度は諫早市教育委員会の情報 (ICT) 教育の研究指定、さらにパナソニック教育財団より研究実践助成を受け、プロジェクトと実物投影機およびパソコンといった ICT 機器を活用した授業改善に取り組んだ。研究主題を「学びを支える「人」「環境」「習慣」づくりの提案」副題を「グループ学習における ICT 機器の活用を通して」と設定し、グループ学習における ICT の活用方法を探ることで、グループ間のコミュニケーションや、学級全体の情報の共有に ICT を活用する学習を取り入れた効果についての検証を試みた。

年度当初の調査や観察では、教師の目から見て「グループ内での役割分担や教え合いが不十分で、話し合いの内容に深まりが見られない。」、生徒自身の意識調査では、「質問や相談に消極的で、話し合いに入れない生徒もいる。」という実態が浮かび上がってきた。生徒どうして行われる意見交換を通して、課題を正しくつかみ、自分の意見をわかりやすく伝えるための思考力や表現力が養われると考え、基本的な学習集団としての学級が親和的でまとまりのある集団に近づくことで、生徒の言語活動や知識の活用が活発になると考えた。また、自ら学んだ知識を活用したり、思考力を深化する段階に至っていないことを教員が共通理解し、ICT 機器とシンキング・ツールを活用した授業を行うことで、生徒が自分の考えを発信・発表する際に、どのように伝えればよいのかを吟味する「他者意識」が芽生えると考えた。

2. 研究の目的

研究を充実・発展させるために、2つの柱を設定した。1点目は、ライフスキルプログラムを実践することで、基本的な学習集団である学級において学習を阻害する人的要因を極力取り除き、学習効果の最大化を図る。2点目は、授業の中に適切な課題を設ける活動を設け、ICT 機器を活用したグループ学習を行う。その際、シンキング・ツールを活用して問題の解決を図ることを試みることで、生徒の思考力・表現力の育成を図る。

3. 研究の方法

(1) 研究の仮説

① 集団づくりの仮説

ソーシャルスキルトレーニングやグループエンカウンターを行うことで、学級が「親和的でまとまりのある集団」になれば、生徒どうしが「教え合い・学び合う」ようになるであろう。

② 授業づくりの仮説

ICT 機器を活用することで、教師が「教えて考えさせる」ことを意識した授業を行えば、生徒は学習内容や学習課題が「わかる・できる」ようになるであろう。

(2) 検証の方法

① 集団づくり

Q-U アンケートおよびライフスキルプログラム効果測定調査アンケート等の質問紙による評価

- ② 授業づくり
ワークショップ型授業研究による授業改善についての評価

4. 研究の内容

(1) 集団づくりに関して

- ① ライフスキルプログラムの実施
年間 15 時間程度のライフスキルプログラムを総合的な学習の時間に実施することで、生徒どうし・生徒と教員・家族・地域住民との間のよりよい人間関係の構築を支援する。
- ② ライフスキル効果測定調査アンケート
4・7・12・2月に実施し、ライフスキルプログラムが生徒個人に及ぼす影響を把握することで、本校の実態に応じたライフスキルプログラムの修正を行う。
- ③ Q-U アンケート
5・3月に実施し、学級および生徒個人の学級に対する満足度とソーシャルスキルの習得の度合いを把握し、次年度の生徒指導および学級経営に反映させる。

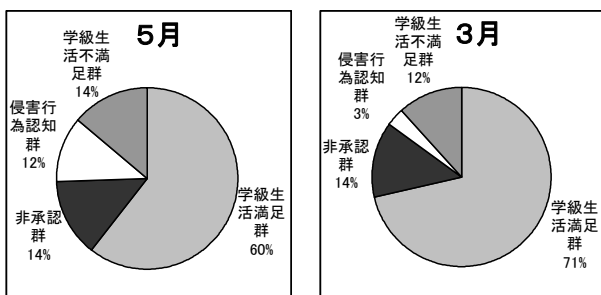
(2) 授業づくりに関して

- ① ICT を活用してグループ間のコミュニケーションや学級・学年などの集団全体での情報の共有化を図る活動を設定した。
生徒が学ぶ価値のある（調べる価値のある、練習する価値のある）課題を設定することに留意し、生徒間のコミュニケーションの機会を増やし、自発的な教え合いや学び合いの活動を期待してジグソーメソッド等の手法を取り入れた。
また、デジタルカメラやビデオカメラ等を活用した取材や調査活動と、グループによるプレゼンテーションの共同作成およびその吟味等の学習活動を行った。
- ② シンキング・ツールの活用
自分自身の考えを他者に対して表明できるようになるために、アイデアや問題を視覚化し、考えや情報を整理するためのシンキング・ツールの活用に取り組んだ。

5. 研究の経過

(1) 集団づくりに関して

次の円グラフは、平成 22 年 5 月と平成 23 年 3 月の Q-U



アンケートの結果を示している。

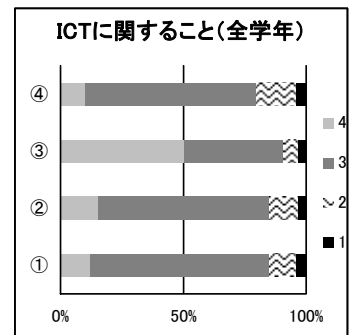
「学級生活満足群」とは、学級内に自分の居場所があり、学校生活を意欲的に送っている生徒、「非承認群」とは、いじめや悪ふざけを受けてはいないが、学級内で認められることが少ない生徒、「侵害行為認知群」とは、いじめや悪ふざけを受けているか、他の生徒とトラブルがある可能性が高い生徒、「学級生活不満足群」とは、耐えられないいじめや悪ふざけを受けているか、非常に不安傾向が強い生徒を表している。

学年によるライフスキルプログラムへの取り組みの差（時数にして 9 時間程度）があるものの、学級内のルールの定着が低く、人間関係も希薄な状態の集団から、学級内のルールが確立されていくことで、少しずつ「親和的でまとまりのある」状態へと移行しつつある。

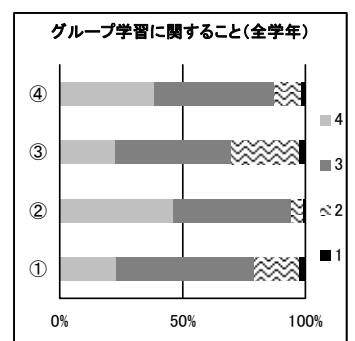
(2) 授業づくりに関して

右の 2 つのグラフは、平成 23 年 2 月に生徒を対象に実施したアンケートの集約結果の一部である。

「ICT に関すること（全学年）」というグラフ中の③の項目は「説明などがわかりやすくなる」という質問に対する「4 とてもあてはまる、3 だいたいあてはまる、2 あまりあてはまらない、1 ほとんどあてはまらない」という生徒の割合を示している。半数の生徒が「とてもあてはまる」と回答しており、グループ学習において ICT を活用してコミュニケーションを行う際に、情報を発信する側よりもそれを受け取る側にとっての効果が大きいことがうかがえる。



「グループ学習に関すること（全学年）」というグラフ中の④の項目は「協力して教え合いや助け合いの学習ができた」、②の項目は「他の人の意見をきちんと理解できた」の項目を示している。



グループで協力してプレゼン資料を作成し発表するという学習活動の結果、資料に対する生徒自身の考えをグループ内で交流することでより理解が深まった様子が見られる。

6. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

① 集団づくりに関して

ア. より深い生徒理解 教員が生徒を観察して得た情報と、

生徒が Q-U アンケートに答えた内容に大きな違いはなく、学級における生徒の満足度の変動から、生徒の抱える問題に気づくなど、生徒理解がより深まった。

- イ. 同僚意識の高揚 教科の枠を超えて、学年担当全員でライフスキルの指導案を検討することで、共通理解のもと指導ができるようになった。授業前後の検討・反省やワークシートやパワーポイント資料などの改善を繰り返すことを通して、本校生徒の実態に合った指導案を作成することができるようになり、職員間の協力体制がより充実してきた。

②授業づくりに関して

- ア. 発表とその吟味を通じた思考力や表現力の高まり
自分の考えを他者に伝える際に、どのような資料を使えばよいか、その資料をどのように提示すればわかりやすくなるかについての生徒自身の理解が深まった。
- イ. シンキング・ツールの定義の拡大
イメージマップ・分析表 (PMI)、P&S シートなどのシンキング・ツールを実際の授業での使用を試みた。学習者の理解を助けるためのワークシート等を広義でのシンキング・ツールととらえ直すことで、教員が思考力や表現力の育成を日常的に意識するようになった。

(2) 研究の課題

①集団づくりに関して

- ア. ライフスキルプログラムを実施する時間の保障
ライフスキルプログラムの内容の精選と実施時期の検討
- イ. 研修の充実
ライフスキルプログラムの実施には、専属講師による2日間のワークショップに参加し、プログラムのユースウェアを身につける必要がある。毎年メンバーが入れ替わる公立中学校では、校内および校外での職員研修のあり方を考える必要がある。

②授業づくりに関して

- ア. グループ学習のあり方
話し合いの目的、役割分担、メンバー構成、話し合いの進め方など、教科の壁を越えたルール作りの必要性を感じた。その際、ライフスキルの手法が参考になるだろう。
- イ. 生徒に ICT の活用方法を考えさせること
プロジェクタと実物投影機は生徒にも活用しやすい ICT 機器であると考えられる。さまざまな教師の活用例は紹介されているが、生徒の活用例を今後蓄積していくことで、生徒による ICT 活用がさらに進むものとする。

7. おわりに

電子黒板や生徒一人ひとりに PC 端末を使った実践が公開されるようになったが、本校はようやくプロジェクタと実物投影機が普通教室に配備されたところである。本校から転勤していった教員の中には、生まれて初めてプロジェクタや実物投影機を自分の授業で使ったという教員もいる。教室の備品の一部となりつつある ICT 機器を教員と生徒がどれぐらい使いこなしていけるか、本校における ICT 活用の「定着」と「普及」は始まったばかりである。

参考文献

- 『Thinking Tool シンキング・ツール』 関西大学・NPO 法人学習創造フォーラム
- 『「考える力」はこうしてつける』 ジェニ・ウィルソン、レスリー・ウィング・ジャン著、吉田真一郎訳 新評論
- 『考える・まとめる・表現する』 大庭コテイさち子著 NTT 出版